

# 特別支援学校に在籍する知的障害と肢体不自由を併せ有する児童の小学校の行事を活用した交流及び共同学習

## 1. 事例の概要

A児は、知的障害と肢体不自由を併せ有する、B特別支援学校小学部6年生である。座位保持椅子を使用している。日常生活においては、排せつ、移動、着替え、食事等は全介助が必要である。コミュニケーションに関しては、言語による発話はないが、音声出力会話装置のスイッチを押して応答し、呼び掛けにうなずくことがある。

本事例は、A児がC小学校の行事である、「子どもまつり」に交流及び共同学習で参加したことに係るものである。「子どもまつり」の当日は、A児も店員として参加し、音声出力会話装置を使用して受付や呼び込みの係を担当し、A児の活躍の場面を設けることができた。また、A児の呼び込みに、他学年の児童が声を掛ける様子も見られ、多くの児童と関わりをもつことができた。

児童の願いや実態を的確に把握し、各学校の担当者間で十分な打合せを行いながら協力して取り組むことが、対象児童生徒や交流先の児童生徒双方にとって効果的な交流及び共同学習につながると考える。

**キーワード** 学校行事、交流及び共同学習、音声出力会話装置

## 2. 児童の実態

A児は、知的障害と肢体不自由を併せ有する、B特別支援学校小学部6年生である。座位保持椅子を使用している。日常生活においては、排せつ、移動、着替え、食事等は全介助が必要である。視覚は、斜視があり、視線を合わせることが難しい。光や明るい色、動くものを好み、目で追う様子も見られる。

コミュニケーションに関しては快・不快がはっきりしており、嬉しいときには、膝や机を手のひらで軽く打ちながら笑ったり、上半身を左右に揺らしたりする様子もみられる。言語による発話はないが、音声出力会話装置のスイッチを押して応答したり、呼び掛けにうなずいたりすることがある。

## 3. 本事例に関する基礎的環境整備

- 毎年、5月にB特別支援学校にて、交流先の特別支援教育コーディネーターや交流学級担任、交流及び共同学習対象児童生徒担任が一堂に会し、対象児童生徒についての情報交換、今後のスケジュールなどを確認している。【基礎1】
- B特別支援学校担任と交流学級担任、保護者との間で、交流及び共同学習の活動のねらいや内容、準備物、配慮事項等の共通理解を図るため、交流及び共同学習実施計画書と交流及び共同学習の記録を作成している。【基礎8】
- B特別支援学校では、児童生徒一人一人の実態に応じた教材・教具を作成しており、交流及び共同学習においても、その教材・教具を活用している。【基礎4】

## 4. 合意形成のプロセス

C小学校との交流及び共同学習について、保護者より今年度もぜひ継続して実施し

て欲しいとの申出があった。参加を希望する内容は、音楽的な内容の交流と学習発表会、「子どもまつり」などの行事への参加などであった。また、C小学校では、新年度、学校長や交流学級の担任、交流学級の児童が変わったために、あらためてA児への理解・啓発を促して欲しいという希望が出された。そこで、手紙や写真などのやり取りを行うなど、日常的に交流を進めていくことを提案し、保護者と合意形成を得ることができた。

## 5. 合理的配慮の実践

- C小学校での「子どもまつり」の活動において、A児が座位保持椅子で効率よく移動できるよう、事前に教室配置図をもらい、C小学校の特別支援教育コーディネーターと「子どもまつり」で児童が出店する店の位置や回る順番、移動しにくい場所等のA児の移動の仕方の確認を行った。【合理①-1-1】
- 出店した店で、A児も店員として参加できるように、音声出力会話装置（写真）を使用し、受付や呼び込みの係を担当した。事前に交流学級の児童に「ようこそ〇〇（お店の名前）へ。」「ありがとうございました。他の人も誘ってみてね。」という声を録音してもらい、A児は音声出力会話装置のスイッチを押し、店員として参加することができた。【合理①-2-1】
- C小学校の児童や教員にA児のことを知ってもらうために、交流学級前の掲示板に「居住地校学習ボード」を設置し、A児の自己紹介や交流及び共同学習の予定、メッセージ、交流学級とやり取りした手紙などを掲示した。【合理②-2】



写真 音声出力会話装置

## 6. 本事例の成果と課題

C小学校の行事「子どもまつり」での交流及び共同学習では、事前に綿密な打合せをすることで、A児のスムーズな活動につながったと言える。まず、最初にA児の興味のあることや好きなことをC小学校に伝えたところ、交流学級の児童が、どのような活動を行うとA児が楽しめるのかを話し合い、活動のアイデアを提案してくれた。また、C小学校の特別支援教育コーディネーターとの事前打合せでは、交流学級の児童が提案してくれたアイデアをもとに、A児の移動のルートを決めたり、B特別支援学校担任の動きとC小学校の支援態勢を確認したりすることができた。事前にシミュレーションを行うことで、当日はスムーズに活動することができた。また、当日は、交流学級の児童が、A児にとって楽しめそうな店を選んで案内したり、A児の安全を考えながら座位保持椅子を押ししたりする様子がみられた。お店の中では、A児も店員として参加し、音声出力会話装置を使用して受付や呼び込みの係を担当し、A児の活躍の場面を設けることができた。A児の呼び込みに、他学年の児童が声を掛ける様子も見られ、多くの児童と関わりをもつことができた。このように、交流及び共同学習では、児童の願いや実態を的確に把握し、各学校の担当者間で十分な打合せを行いながら協力しての取組が、対象児童生徒や交流先の児童生徒双方にとって効果的な交流及び共同学習につながると考える。

課題としては、学校行事における交流及び共同学習は、児童同士が自由にゆったりと触れ合う時間を取ることが難しい。児童がA児とじっくり関わるには、交流学級という小集団の中で交流及び共同学習を行う機会も大切であると感じた。